

天草郡有明村における和牛肥育の実態

児玉国弘*・平川公明*
南 勉*・長野晴喜*

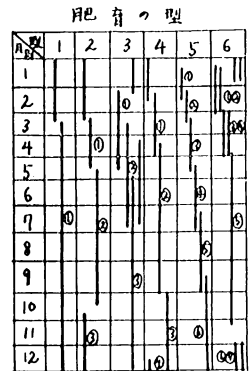
KODAMA, K., HIRAKAWA, K., MINAMI, T. and NAGANO, H.
A Condition of Bring Up of the Cow in Ariake
Village, Amakusa, Kumamoto Prefecture.

まえがき 合理的農家経営の一環として近時畜産農業が叫ばれている。又本県においては水稲早期栽培が災害回避策として取上げられ、水稲の増収安定度を急激に向上しつつある。そして水稲の生育期間が短縮され、かつ可動性を有するならば、従来の固定された米麦2毛作の単純作式にも終止符がうたれ合理的多角化の方向に進むであろうが、畜産農業と水稲早期栽培との関係をどう結びつけるか、このようなテーマで本県では数少ない和牛肥育地帯として知られた天草郡有明村下津江部落の現状について分析をこころみた。

調査結果 この和牛肥育の発端は古く明治の末期に始る。そしてセリ市の開設肉牛組合の結成によって、大正末期から昭和12~13年頃まで全盛をきわめ300頭にも達するが、これは安価に入る満洲産大豆と自家生産甘藷の飼料構成に支えられて発展したものとされる。然し今日自家生産の甘藷、麦類に購入飼料大豆粕、麦糠、澱粉粕に依存する飼料給与の構造は価格上昇のため極めて不合理となり、1頭当り1万円以上では短期肥育を前提とする以上赤字農家も続出する。素牛の購入はある一定地区に限られ5~6才の褐色去勢牛が使用されるが、これは農耕使役を兼ねたものであつて使い易く骨格もしつかりし粗悪の飼料にたえ、発情期がなく、又喰込みがよいといつた色々の利点が認められるようだ。又肥育期間は短期肥育が最も多く2ヶ月前後が58%、3ヶ月30%、6ヶ月8%となり1年以上の長期肥育は殆んどみとめられない。これを型別に分類すれば図標で示す如く、秋から春にか

けて短期同時2~3頭夏長期の7~8頭型、短期連続6~8頭型、春秋短期夏やや長期の4~5頭型、春短期2~3頭、夏秋長期の4~5頭型、春短期夏秋やや長期の3頭型、年間1頭の長期型の6つに分類され年間平均5頭の肥育頭数となる。素牛の購入、肥育牛の販売に対する関係はこの肥育事業を左右する問題であるが、その取引はすべて家畜商を通じ又家畜商は農家の好みを熟知し指導者としての性格が強く、農家との関係は極めて深い。そしてその販売先は八代、広島、大阪等の家畜商とつながり限定されている。以上からみてこの肥育事業は経済的にみて決して良好とは思われず、今後の問題として自給飼料の生産確保と飼料給与の改善により購入飼料を最低限に縮少し購入販売組織の改善、そして如何にこれを営農体系の一環に結びつけるかが問題であろう。

むすび 水稲早期栽培がこの部落では全面的に普及し、作物編成が大きく変りつつある。そして跡作利用の飼料作物も2~3月刈りの青刈飼料その他で反当5~900貫程度の収量をあげることが立証され、又通気乾燥材等の設置により乾燥飼料の作業等も考えられ、自給飼料の生産確保は極めて明る見通しである。そしてこの肥育事業が経営合理化の線に沿つて真に発展向上せんことを希望する。



*熊本縣農業試験場